

〔史料紹介〕

奏 楽 御 用 留 (弘前図書館岩見文庫蔵)

武 内 恵美子

本史料は弘前図書館岩見文庫の所蔵本である(Ck7689)。体裁は横一七・一センチ、縦二五・二センチ、七行本で全七丁、簡単な図が三点挿入されている。表題には「奏楽御用留」とあり、嘉永元戊申年九月七日の日付がある。奏楽とは雅楽の演奏のことである。

表紙(表)から表紙裏にかけて、川越東一・佐田平吉・斎藤善兵衛・木村才助・佐田大之丞・伴勇蔵六名の氏名が記載されており、この史料作成当時は彼等が弘前藩における奏楽の中心的存在であったことを伺わせる。ただし、川越東一については慶応二年五月に隠居願が受理されている。一方、木村才助と伴勇蔵には「御免願之通被仰付候」とあり、東一と入れ替わりで奏楽御用に任ぜられた可能性がある。

右記のように、慶応二年五月廿一日の日付があることから、本史料の執筆年代は、表紙に記された嘉永元年ではなく、慶応年間であると考えられる。あるいは、本文中の天保一四年の記事とそれ以降の記事では記載方法に若干の相違が見られることから、嘉永元年の史料に加筆し、編集し直した可能性も考えられる。

内容は、天保一四年(一八四三)・安政五年(一八五八)・文久二年(一八六二)に行われた奏楽聴聞に関する記録、および慶応二年(一八

六六)から翌三年にかけての奏楽教習停止に関する記録である。

聴聞に関しては、申渡から当日の行程、演奏された曲目、演奏者名等が詳細に記録されている。天保一四年には《賀殿》《林歌》《青海波》《拔頭》《合歓塩》、安政五年には《五常楽》《越天楽》《拔頭》《蘭陵王》《林歌》、文久二年には《賀殿》《五常楽》《林歌》《太平楽》《拔頭》と、それぞれ五曲ずつ演奏しており、安政五年及び文久二年に関しては演奏者と担当楽器名まで記載がある。演奏者は表紙に記されている人物以外にも十名以上挙げられており、中には代々音楽を継承していた館山家の名前も見られる。また、聴聞の際の配置図も添えられており、どのように奏楽を行ったのが詳細に記録されている。なお、奏楽は器楽演奏であり、舞楽ではない(舞は付けられていない)。

弘前藩校である稽古館が寛政八年(一七九六)に開校された際、奏楽は経学・数学等とともに科目として設定された。奏楽は、しばしば礼楽思想、特に楽の体現として、儒学・国学関係者および儒学・国学に関心を寄せる武士等が行っていたことが知られているが、実際に藩校で科目として採用した藩はそれほど多くはなかったと考えられる。そのような中で、弘前藩が奏楽を取り上げていたことは注目に値する。

しかし、稽古館では、規模縮小のため文化五年（一八〇八）に教科を経学・書学・数学に限定するという方向転換を実施した。この際、奏楽がどのように扱われたのかは未詳であるが、最終的には慶応二年（一八六二）三月に再度規則改定が行われ、奏楽・諸礼の教科が中止された。以上が従来『新編 弘前市史』でまとめられた稽古館における奏楽関係の情報であるが、具体的な動向については不詳であった。

本史料に記された内容は、左記の漠然としていた部分を説明する手掛かりとなる。具体的な分析は改めて行うことにするが、例えば、表紙にも氏名がある斎藤善兵衛は、御馬廻与力でありながら奏楽の稽古を命じられたことが記されており、奏楽は専業ではなく兼業であったことがわかる。また、慶応三年の学問所における奏楽教習が停止された件については、自宅で教授を行うように命じられ、楽器類が自宅に下げ渡されたこと等が記されており、当時の動向が悉に分かる等、奏楽に関する貴重な情報を提供してくれる。

また、本史料に記載されている奏楽の動向を鑑みれば、幕末期の楽思想に関する意識や様態を説明する手掛かりになると推測される。それらのことから、弘前藩の範囲にとどまらず全国的に見ても大変重要な史料となり得ることは間違いないだろう。

さらに、このように他に類を見ないほど詳細な奏楽の記録からは、当時の演奏習慣、演奏方法や演奏時間等、演奏を含めた雅楽の音楽面に関する多大な事実を見出すことができる。このように、複数分野に貢献する大変貴重な史料であることから、翻刻する次第である。

参考文献

- 新編弘前市史編纂委員会編集 市尾俊哉監修 二〇〇三
『新編 弘前市史』通史編三（近世二）
新編弘前市史編纂委員会編集 市尾俊哉監修 二〇〇〇
『新編 弘前市史』資料編三（近世編二）

【凡例】

- 一、旧漢字・異体字は原則として当用漢字に改めた。
- 一、合字は用いず、適宜平仮名に改めた。
- 一、当て字や誤字等はそのまま記載した。ただし曲名の当て字については右横に「」で筆者注を挿入した。
- 一、適宜句読点を挿入した。
- 一、文字の配置を一部適宜改めた。
- 一、判読不明な字については□で表した。
- 一、図一は絵が含まれるため文末に画像を示し、図二・図三は文字のみで示された配置図であるため翻刻のみを掲載した。

【翻刻】

（表紙）
嘉永元戊申年

奏楽御用留

九月七日

(表紙裏)

東一義慶応二五月廿一日

御免願之通被仰付候
木村才助
佐田大之丞
慶応二五月隠居願之通被仰付候
御免願之通被仰付候 伴勇藏

覚

一、天保十四癸卯年五月十日御聴聞被仰出、斎藤善兵衛御馬廻与力之処諸勤行之上稽古被仰付候事、

一、同年閏九月廿八日於梅ノ間御聴聞被仰付、斎藤善兵衛忌中之処忌御免被仰付候事、

一、廿八日九ツ前裏板ノ間之通御詰坐敷ノ後江相詰、九ツ時半御湯漬頂戴被仰付、八ツ頃より賀殿 林歌 青海波 祓頭 合歡

右五曲申上候処、七ツ半頃ニ相濟、一統詰所江引取、帶刀殿老人残り

御前江近く進候様被仰縷々樂之御嘶御長談被遊、詰所江引取御燭台ニ相成、直様丹下御居間江被召一統江御意被下置、其節御意ニハ此方之

代ニ取立候樂ならい廃してもよん所かない、先代之御取立被成候樂、此方之代ニ廃候而ハ先代ニ申訳ハない、末永廃セない様ニ致て呉よ、

今日ハ何れも至極宜出来た、感心致と、一統退下六ツ過ニ相成候、其節出人数左ニ、

兼平帯刀 同丹下 同弁之助

川越東一

佐田平吉

斎藤善兵衛

木村才助

佐田大之丞

伴勇藏

毛内有右衛門 木村才助 小山内安左衛門

松井武四郎 大道寺源之進 吉崎伴之進

斎藤善兵衛

拾人

右之外筈温方川村閑吉 木村永太郎、此二人迄御湯漬被下置候

(図一)

客中庭		上様 有孝院様	奥役
箏 箏 太鼓		笙 笙 笙 笛 笛 笛 箏 箏	

一、安政五年午三月六日惣司樂被成聴聞、右出人数、

平調音取 大道寺源之進、山形修助、佐田平吉、館山勇三郎

五常楽 大道寺源之進、小野若狭、山形修助、斎藤善兵衛、佐田平吉、

伴勇藏、斎藤鉄太郎、館山勇三郎、斎藤長門

越天楽 斎藤長門、大道寺源之進、毛内平二、斎藤善兵衛、山形修助、

伴勇藏、葛西祐助、斎藤鉄太郎、館山勇三郎、佐田平吉、小野若狭

大食調音取 毛内平二、斎藤善兵衛、館山勇三郎、佐田平吉

発頭 佐田平吉、毛内平二、小野若狭、斎藤善兵衛、山形修助、館山

勇三郎、伴勇藏、葛西祐助、斎藤長門

老越調蘭陵王 小野若狭、大道寺源之進、毛内平二、山形修助、佐田

平吉、伴勇藏、館山勇三郎、斎藤長門、同善兵衛

林歌 館山勇三郎、毛内平二、小野若狭、山形脩助、斎藤長門、佐田

平吉、伴勇藏、斎藤善兵衛

以上五曲、則日諸礼試相濟、八ツ頃より初り譜御好ニ而輪鼓揮晚合歡

宴申上候、

一、文久二壬戌年五月廿二日・廿四日両日、学問所被為入各堂諸芸御試
被為遊、廿四日御帰候而済否奏樂取扱式人御呼上、小司申ニハ奏樂
御聴聞被仰出候間、明日四ツ前迄名前差出候様被仰付候旨申候間、左
ニ申上候、

覚 「奏樂人数名前書上

覚 奏樂取扱」

小野若狭 斎藤善兵衛 佐田平吉

笙 竹内庄八郎 簞 大行院 笛 斎藤長門

川越又八郎 斎藤伝太夫 伴勇藏

斎藤鉄太郎

右之通ニ御座候、尤何れも箏・太鼓兼業ニ御坐候間、管絃曲組之義ハ
御日限被仰付候処ニ而可申上候、此段御申上候、以上、五月廿五日
奏樂取扱 小司申様

御用状之写

以手紙致啓達候、来ル八日奏樂三之丸於御屋形御聴聞被遊候、尤出人
数之儀ハ学問所江詰させ置左右被仰付候処ニ而三之丸江罷出候様被仰
付候間、出人数九時迄ニ学問所江相詰居候様、別紙名前則相廻候、此
旨申入候、以上、六月五日 奏樂取扱申様 小司

一、六月八日五ツ半時、川越東一宅江染人不残相集り五曲吹合、四ツ半
前同所ニ而昼飯相振廻、夫より九ツ時前学問所江相詰罷有候処、九ツ
時否御供揃之由、早速御屋形江相詰候様左右参候ニ付、直様同所江相
詰候所、御側役差図ニ而大暑ニ付御武芸之所詰合ニ如何と問合ニ付右
之所江薄縁布立詰居申候所内習相濟、直様御入被遊箏調子相立、御聴
聞相初申候、二曲相濟御茶頂戴被仰付候、三曲相濟寛々休息候様御意
被下置候、五曲相濟御湯漬江御酒頂戴被仰付候、尤中田美右衛門殿御
側役出席ニ而御意之趣何れも至而宣出来感心致し候、此末とも出精
為致候様、夫より御樂不残高覧被遊、和曲迄学問所より取寄申候、樂
人御酒頂戴申御側役より取扱江御意、今日上様至極御喜ニ而寛々御樂
ミニ付一統寛々頂戴候様、其時御樂器御下願候御下被仰付候、夫よ
り学問所江退下之時七ツ半過ニ相成申候得共、右首尾能相濟候旨惣司
津輕平八郎殿小司赤松桑之助宅江罷出達帰宅致候、尤取扱老人当所江
罷出候翌日御側役江礼ニ罷出候、出人数曲組、

覚

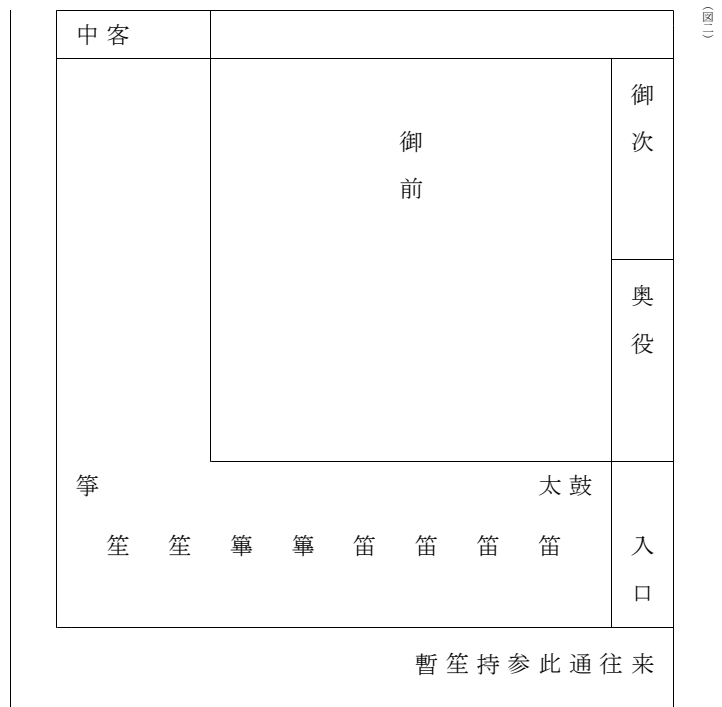
老越調 賀殿 平調 五常樂 林歌

箏 大行院 箏 斎藤長門 川越又八郎

笙 竹内庄八郎 笙 竹内庄八郎 小野若狭

小野若狭 川越又八郎 竹内庄八郎

大食調	發頭	太平樂	發頭譜
佐田平吉	川越又八郎	小野若挾	太鼓
竹内庄八郎	小野若挾	竹内庄八郎	大行院
小野若挾	大行院	齋藤善兵衛	大行院
齋藤善兵衛	大行院	拍子	大行院
大行院	伴勇藏	竹内庄八郎	大行院
齋藤伝太夫	伴勇藏	同鉄太郎	大行院
伴勇藏	伴勇藏	同鉄太郎	大行院
齋藤鉄太郎	伴勇藏	同鉄太郎	大行院
齋藤長門	伴勇藏	同鉄太郎	大行院
以上五曲奏樂取扱	伴勇藏	同鉄太郎	大行院



御鐘掛之間ニ而被下方之図

取 扱	司 覧	十 三 人 列 坐 頂 戴	人 樂	人 樂	人 樂
取 扱	山 田 仁 十 郎				
			同		
			御 之 備 御 酌		
			人 樂	人 樂	人 樂
			栗 田 次 兵 衛	笙 持 式 人	川 城 葵 吉

一、六月十日赤松衆之助御会潰江出勤之節上意、稽古館之樂を初而聞し候が中々丹能し候、何れも感心致し候、時習館之樂と何二も違事がない、只管絃之次第違ふ様ニ思召候、

以手紙啓上候、来ル八日奏樂三之丸於御屋形御聴聞被遊候、尤出人数之儀ハ学問所江詰せ置左右被仰付候処ニ而三之丸江罷出候様被仰付候間、出人数九ツ時迄ニ学問処江相詰居候様、別紙名前相廻候、此旨申入候、以上、六月五日

齋藤善兵衛様別紙在中 小司

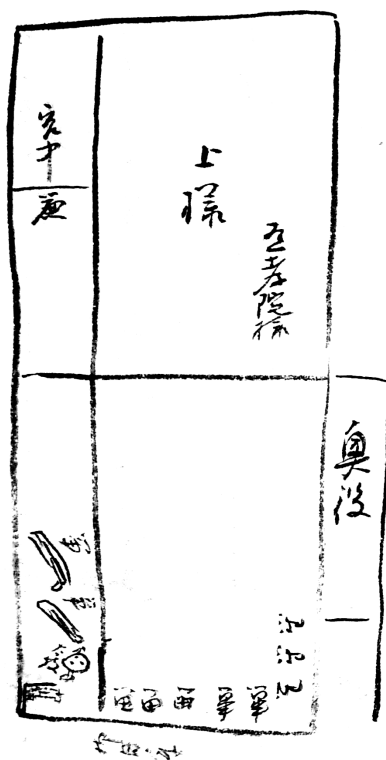
一、奏樂之義、御趣意ニ而御開業被遊候、然ニ時勢不得止事段々衰盛ニ及候ニ付絶伝ニ至候而者以之外ニ付、此度寺社江取懸候様演舌致し候間、学問所奏樂取扱之面々右之趣差含教授致し候様、猶又学問所ニ而も稽古有之候所、近來取懸候族も無之趣ニ付是迄取懸候族并分望之族も文武芸道差障無之様取掛セ度候間、右之趣取扱之面々江申談候様、慶応二寅ノ三月七日

右之趣於御城山野主馬殿御演舌小司楠美泰太郎承之、

一、奏樂之儀、当分之内学問処御止被仰付候間取扱於宅教授いたし候様、尤御道具宅下ケ被仰付候事、慶応三卯年二月廿日

一、以手紙致啓達候、一季御手当是迄之通被下候様被仰付候、此旨申入候、以上、

卯九月廿一日 奏樂取扱申様 小司



【付記】

本稿は科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究「弘前藩における「音」文化の成立及び「楽」思想の形成と近代への展開（二〇一一年度―二〇一三年度、研究課題番号 二三六五二―五九）の研究成果の一部である。

（たけのうち・えみこ 秋田大学教育文化学部准教授）